

和輪庵庭園

植彌加藤造園株式会社
代表取締役社長
加藤 友規

1. 概要

和輪庵（旧蒲原達弥邸）は、南禅寺界限別荘庭園群の中でも名高い名園のひとつである。明治 23 年（1890）に竣工した琵琶湖疏水分線に沿っての散策路は、現在「哲学の道」と称され多くの京都市民や観光客に親しまれている。哲学者の西田幾多郎がこよなく愛したといわれるこの散策路には、日本画壇の巨匠橋本関雪が大正時代に植樹したサクラが彩を添えている。和輪庵は、この「哲学の道」に面した鹿ヶ谷の地にひっそりと佇んでいる。

大正 8 年（1919）にこの地を所有した蒲原達也は、『日本紳士録第 23 版』（大正 8 年）によると、東京銀座の蒲原商店の業務執行社員であると記されている。蒲原はこの地に、建物から西面の真如堂や金戒光明寺（黒谷）の借景を取り入れた庭園を築造した。敷地面積は約 1200 坪、作庭者は七代目小川治兵衛。南禅寺界限別荘庭園群の多くが琵琶湖疏水の水を利用しているのと同様に、和輪庵の池の水も琵琶湖疏水分線から直接導水されている。昭和 55 年（1980）に京都セラミック（現：京セラ）の所有となり、平成 13 年（2001）には建物の新築と共に庭園も整備され、回遊園路の石橋や滝石組が改修された。現在、京セラの迎賓施設として利活用されている。



写真 1 蒲原達也氏と妻キク
〔大正 8 年（1919）頃〕
（写真提供：中西亨氏）

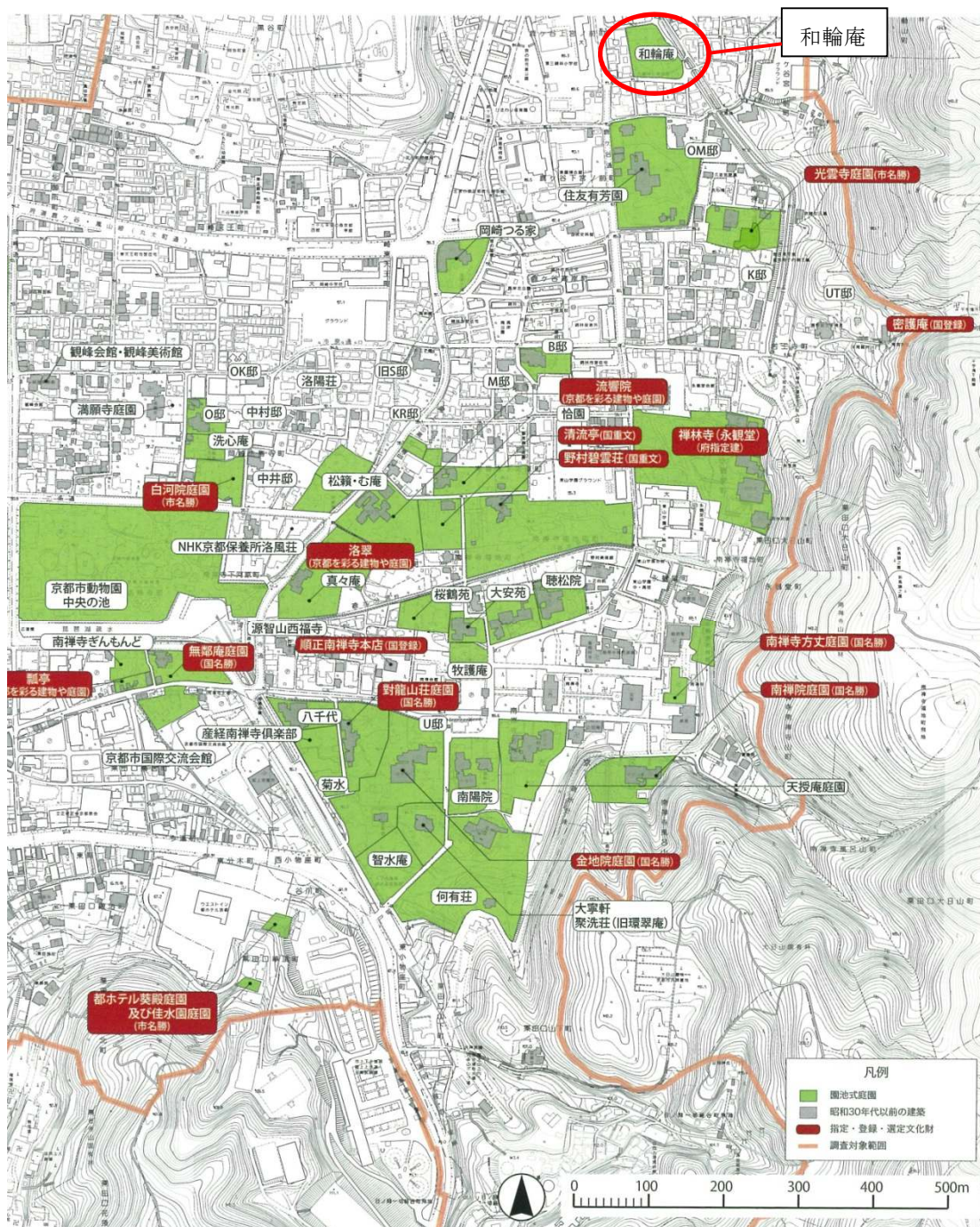


図1 和輪庵と南禅寺界隈別荘庭園群

(出典:「景観構成要素の位置(南禅寺別邸群・疏水園池)」(抜粋) 奈良文化財研究所景観研究室編
『京都岡崎の文化的景観調査報告書』(第6章第2節) 2013 京都市

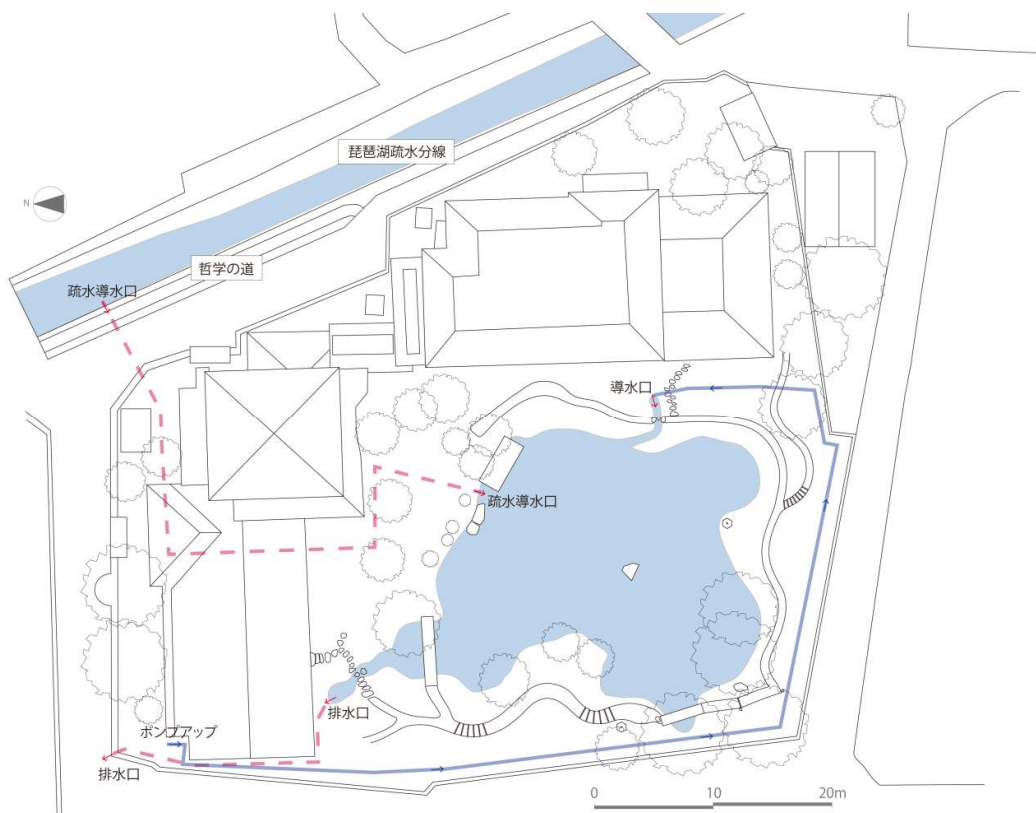


図2 和輪庵見取図（縮尺任意）

2. 和輪庵の特徴

池護岸や園路周辺のアカマツ・クロマツ・モミジを中心にした池泉回遊式庭園である。敷地の東側及び北側に建物を、中央には池を配し、池の北側には芝生広場を擁し、西側に金戒光明寺や真如堂の堂宇を望む構成となっている。

この池の水は琵琶湖疏水分線から導水された後、池の東端の小滝から流れ落ちているが、芝生広場や園路から池を眺めると、高低差が大きく、池のウォーターレベルがひととき低く感じられるのが大きな特徴である。

3. その他の南禅寺界限別荘庭園との比較

和輪庵と、その他の南禅寺界限別荘庭園群における近代庭園との共通点や相違点については、以下のとおりである。

① 共通点：人工物を取り込んだ借景

南禅寺界限別荘庭園群の近代庭園では、周辺社寺に点在する塔や堂宇などの人工物を背景の一部

に取り込んでいることが多い。

具体的には、碧雲荘からは東山の中腹に禅林寺（永観堂）の多宝塔が、何有荘（旧稲畑勝太郎和楽庵）からは北を俯瞰すれば南禅寺三門や金戒光明寺の文殊塔が拝める。

ここ和輪庵でも多くの南禅寺界限別荘庭園群と同様に、西側の植栽帯の背景として、金戒光明寺の文殊塔が効果的なアイ・ストップとなっている。

② 相違点：眺望景観の方位

南禅寺界限別荘庭園群の近代庭園においては、敷地の西側に建てられた東向きの建物から、東山の景観を望むのが一般的で、無鄰菴をはじめ、碧雲荘・流響院・怡園など多くの庭園に類例が見られる。

しかし、和輪庵においては、敷地の東側に建てられた西向きの建物から、西側の真如堂や金戒光明寺の丘を望むのが主要な景観となっており、芝生広場や敷地北西側の園路から、東山を近景に望めむのは副次的な景観となっている点が上記の庭園とは異なっている。

なお、和輪庵のような景観構成を持ち、東山を借景を主要な景観としていない事例としては、智水庵（旧横山隆興別邸）や何有荘などが挙げられる。

参考文献：

尼崎博正（1990）『植治の庭 小川治兵衛の世界』 淡交社

加藤友規（2009）『何有荘庭園における歴史的変遷と復元的考察』 京都造形芸術大学大学院修士論文

奈良文化財研究所編（2013）『京都岡崎の文化的景観調査報告書』 京都市



写真2 現在の和輪庵（撮影：2009年11月）



外観



主屋前にて



池端にて



正門にて



舟遊の様子

写真3 蒲原氏所有時の和輪庵〔大正8年(1919)頃〕
(写真提供：中西亨氏)

庭園学講座XX

日本庭園の モダンとポストモダン

発行者 京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター
〒606-8271 京都市左京区北白川2-116

TEL 075-791-9081
頒価 3,000円

発行日 2013年8月30日

ISBN978-4-903266-02-2 C0070 Y3000E